オーディオ実験室収載

TruPhase の活用(13)
―音源の位相確認(13)―

１．はじめに

TruPhase の位相反転機能を利用して音源の位相確認を行っていますが、前報(12)に引き続き CD の位相確認を行います。

２．TruPhase の位相反転機能による音源の位相確認計画

前報(8)と同様、前報(1)と同じ経路で CD の位相確認を行いつつ、バッハの CD を聴いていきます。

CD ドライブ→fidata HFAS1-S10→Brooklyn DAC+→TruPhase
→300B シングルアンプ

試聴した CD 音源は、バッハの作品で下記のとおりです。

harmonia mundi HMC901772
W.F. Bach Synphonia D-dur 他
Raphael Alpermann（チェンバロ）
ベルリン古楽アカデミー

OMF　KCD-2073
J.S.Bach　　トッカータ集
西山まりえ（チェンバロ）

AMOE　10005
J.S.Bach　イタリア協奏曲他
西山まりえ（チェンバロ）

AMOE　10009
J.S.Bach　2 声のインベンション他
西山まりえ（チェンバロ）

３．TruPase の位相反転機能による音源の位相確認結果

上記 CD について、Brooklyn DAC+での位相反転と TruPhase での位相反転の結果が同じになるかどうかが焦点です。

音量調整を容易にするため、Brooklyn DAC+では位相反転させず、TruPhase で位相反転させた状態で TruPhase のヴォリュームを固定し、TruPhase での位相反転では、Brooklyn DAC+でのヴォリュームでの調整だけにしました。

そして、Brooklyn DAC+では位相反転させないで、TruPhase での位相反転有り無し

で聴いていきます。
Alpermann 盤は、J.S.Bach の長男である W.F. Bach の作品集です。位相反転させますと、定位が曖昧になり、音の焦点が定まりません。位相反転させないと、定位がしっかりして、チェンバロもバックのアンサンブルも音の焦点が明瞭になり、チェンバロを中心に透明感のあるアンサンブルが左右に展開している様が分かります。
西山まりえのトッカータ集の盤は、位相反転させますと、定位が曖昧になり、過度の広がり感が出てきます。位相反転させないと定位がしっかりして音の焦点が合い、どの鍵盤を弾いているかが分かるようです。
西山まりえのイタリア協奏曲他の盤は、位相反転させますと、定位が曖昧になり、過度の広がり感が出てきます。位相反転させないと定位がしっかりして音の焦点が合い、響き具合が明瞭になります。
西山まりえの 2 声のインベンション他の盤は、位相反転させますと、定位が曖昧になり、過度の広がり感が出てきます。位相反転させないと音の焦点が合い、この曲のしみじみとした味わいが出てきます。

４．まとめ

TruPhase での位相反転と Brooklyn DAC+での位相反転の結果は、Alpermann 盤も西山まりえの 3 枚の盤も正相であることが分りました。

以上